



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自立を通じた親子関係の変化と繋がり再検討：関係の中に生きる者が自立を目指すことの意味とは〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	濤岡, 優
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16316号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95449
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	NAMIOKA_Yu_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：濤岡 優

学位論文題名

自立を通じた親子関係の変化とつながりの再検討
：関係の中に生きる者が自立を目指すことの意味とは

本論文は、関係の観点からの自立の再考を目指して、従来の個体としての成熟を前提とした自立の意味ではなく、関係の中に生きることを前提とした自立の意味とは何か、という問いに迫ることを試みたものである。そのために、人が最初に得る他者との繋がりであり、かつ生涯にわたって経験し続ける繋がりとしての親子関係に焦点をあて、子と親両方の視点から、それぞれの立場や親子関係そのものをどのように経験しているのかについて、質的なアプローチを用いて検討した。

具体的には、第1章では、発達心理学領域の先行研究における自立に関する知見を整理した。従来の親子関係研究では、自立の達成には親からの分離を不可欠とするものが多い。一方、近年の研究では、自立は関係からの分離ではなく関係の再構成の中で果たされると説明されるものもあるが、最終的には、親とは異なる個人としての成熟や人格の確立が目指されていること、さらに、それらの研究では、親子関係の再構成過程を検討しているようでありながら、実際には親と子とその関係的枠組みから出て、個人対個人の関係に変化する過程が提示されており、自立や再構成過程の説明の仕方に矛盾があると考えられた。

第2章では、この矛盾を乗り越え、関係を軸に人の存在のあり方やその変化を問うための方法的観点として、Erikson (1964/2016) の〈相互性〉に注目し、この観点を参照して、検討の単位を個人ではなく関係とすること、さらに、関係における立場の差異を重視し、単なる個人対個人ではなく、子／親の立場をもつ者としてそれぞれを位置づけ、その立場での経験を問う、という検討の枠組みを明確化した。

第3章では、本研究の目的を達成するにあたって、特に親子関係の特徴である関係の選択不可能性と、世代的繋がりには焦点をあてる必要性を指摘し、そのうえで、本研究が取り組む具体的な3つの課題、すなわち、親子関係における自立の経験、親子という繋がりでの経験、さらに親子の世代的繋がりでの経験、という3つの経験の問い直しを課題として設定した。各課題の検討から得られた示唆は以下の通りである。

まず第4・5章では、子が自立する時期とされる青年期に焦点をあて、子と親それぞれの視点から、自立の経験の問い直しを試みた。その結果、子の側では、子としてのあり方の変化の様相、具体的には、子であることが当たり前であり、それゆえにその立場が自覚されることのなかった受動的な状態から、子としての立場を自覚的に引き受け親と関わっていく能動的な状態への変化の経験が示唆された。本章ではこれを「子であり続け子になり直す過程」とした。一方、親の立場からみた子の自立の経験、つまり子離れの経験を通して理解されたのは、親として担ってきた子育ての意味は、子離れした時点で、親自身によって見出されるのではなく、子離れした後も続く、子の人生の中で見出されてるものとして認識されていることが理解された。この理解によって、子離れの中で親が手放しているのは、子との関係ではなく、自らが担ってきた子育ての意味であることが示唆された。加えて、親としてのあり方そのものの質的な変化が示唆され、本研究ではこれを「親であり続け親になり続ける過程」とした。

第 6 章では、前 2 章で得られた示唆をもって、人の存在のあり方や発達を理解するには、変化だけではなく変化しないものに視点を向けることの不可欠性を指摘した。すなわち、子／親になり直すという変化の根底に、子／親であり続けるという「不変の相」の経験があること、この「不変の相」を捉えることで初めて変化が変化として取りだされる、ということである。本章ではこの「不変の相」を見る視点を強調するために、変化の相と「不変の相」の両方が経験される繋がりとしての親子関係を「対の関係」とした。

続く第 7・8 章では、2 つめの課題である親子という繋がりへの問い直しを試みた。そのために、親子の繋がりに不安定さをもつ者、具体的には親からの被虐待経験を持つ子や、子育てに関われなかった経験をもつ親にとっての、親子関係や子／親という立場を持つことの意味について検討した。その結果、子の立場からは、親子関係が不安定である場合、親から物理的・心理的に離れ続ける必要があること、一方でそれは関係の断絶を意味せず、むしろ繋がり続けるための関係の 1 つのあり方であることが理解された。さらに、子にとっての親は、自分の存在の「はじまりの地点」を共有する者であり、単なる他者とは区別されること、したがって親子関係は「存在的次元」で経験される繋がりであることが示唆された。さらに、子としての自己のあり方は、受動から能動へというような明確な区切りを持つ態で説明され得ず、むしろ、親の存在があつて自らの存在があるという「存在の受動性」の経験が、子としての自己のあり方の根底にあり続けることが示唆された。一方親の立場では、子育てへの不関与によって、母親へのなりきれなさや、子の人生への介入のできなさの経験があること、それでも子の生存を願うことで、自らを親として認識し続けていることが理解された。さらに、直接的な関わりの有無によらず、存在の「はじまりの地点」を子と共有した時点で、親の人生は自ずと子の人生に影響をうけ、またこの人生と連動しながら進んでいくことが示唆された。

第 9 章では、前 2 章で得られた示唆により、親子関係は「存在的次元」で経験されるという点において、選択不可能性だけではなく代替不可能性を有する関係であること、さらにこの代替不可能性が「対の関係」における「不変の相の経験」であることが指摘された。

第 10 章では、3 つめの課題である世代的繋がりの問い直しを試みた。そのために、前章までにみた 2 世代間での親子関係の経験を、複数世代間における経験として改めて検討し、結果、以下の 2 つの示唆が得られた。1 つは、世代的繋がりを生きる経験は、子から親へ、親から祖父母へという直線的な立場の移行の経験というよりも、親になりながらも子であり続け子になり直し続ける、というような、複数の「対の関係」と立場の重なりを、重なったままに同時並行で生きる、いわば重層的な自己の変容過程であることが示唆された。2 つは、世代的繋がりを生きることは、存在の確かさに関わる経験ということである。すなわち、従来の先行研究で提示されてきた、関心や資源が次世代へと伝達される、前進的な経験に留まるものではなく、世代的繋がりに次世代が新たに連なったとき、ひるがえって次世代を生み出した者の存在がその繋がりの中で確かにされ、関係の中に根づいていく、いわば「垂直的な自己の根づきの経験」であることが示唆された。

第 11 章では、本論文の結論として、関係の中に生きることは、前に進むこと、変化することのただで経験されるのではなく、前に進みつつも自らの「はじまりの地点」に絶えず立ち戻り続ける中で経験されること、すなわち、人は発達が前に進めば進むほど、自らの「はじまりの地点」を問わざるをえない存在であること、したがって、関係の視点から再考される自立の意味は、自立そのものを達成することではなく、自らが関係から切り離されない存在であること、すなわち自立し得ない存在であることと向き合うことにあり、という視座を提起した。最後に、生涯発達心理学研究における本研究の意義と、限界点および展望を議論した。